

令和六年度 垣生中俳句会（六月） 入賞作品

金賞

五月雨や空模様にも染め残し

どんよりとした梅雨空をよく眺めてみると、ところどころで雲の厚みが違うことに気がつきます。厚いところは暗く重たく、薄いところは太陽の光が届いて白っぽく明るくなっています。そんな空模様の濃淡を染め残しになぞらえた一句かと思えます。布地や衣服を連想させる「模様」と「染め」の語が縁語のよくな趣を醸し出していますね。ただ、「五月雨」は梅雨期に降り続く雨を指す季語です。この句の主題は空の濃淡にあるのでしよから、梅雨どきの空模様をいう「梅雨空」を使ってみてはどうでしょうか。季語や助詞にこだわって推敲してみると、より情感豊かな句になりますよ。



銀賞

風鈴をチリンチリンと猫パンチ

思わず微笑んでしまうような可愛らしい一句。ゆらゆらと風に揺れて音を鳴らす風鈴が不思議なのか、猫が弄って遊んでいる情景に心が和みますね。風鈴は風に吹かれてチリンチリンと鳴るものですが、後の五音で鳴らしているのが風ではなく猫であることが分かります。風鈴の音の擬音でありながら、間を置かずにパンチしている興味津々な猫の様子形容にもなっているのが上手いですね。また、オノマトペやカタカナ表記が「猫パンチ」の滑稽を引き立てていて面白いです。



銀賞

ひからびた体にしみるソーダ水

う夏の暑さに干からびてしまう季節がもうすぐそこまで来ていますね。カラカラの体に冷たくてシュワシュワのソーダ水が沁みわたります。炭酸が喉を刺激して痛快な気分になさせてくれます。なんとも夏らしい一句。

銅賞

あまがえる君の親友ぬれている

小さくて可愛らしい雨蛙が大きな声で鳴いています。「君の親友ぬれている」は誰の視点でしょうか。自分ではない「君」がいて、「君の親友」である「あまがえる」が雨に濡れて鳴いている様子を自分が眺めているのでしょうか。「あまがえる」が、「君の親友」である僕が「ぬれている」んだぞ！」と大きな声で主張していると想像しても面白いですね。それとも、「あまがえる」に対して、『君の親友』である僕も君と一緒に『ぬれている』よ」と呼びかけているのでしょうか。想像が膨らみますね。

銅賞

夏来る路上で猫も陰探す

「暑くなつてくると涼しい陰を歩きたくなくなります。路上で陰を探しながら歩いていると、自分と同じようにうろうろしている猫が一匹。一人と一匹で陰から陰を分け合いながら歩いていくのでしょうか。微笑ましい光景にほっこりしました。

銅賞

思い出す祖母と見ていた夏蛍

蛍を見て、かつて祖母と見た蛍を重ねている一句。蛍を契機に祖母との思い出の数々が蘇ってきます。古来から蛍の光を魂と見る発想がありますが、祖母を思い出しているあなたのそばを飛んでいる蛍のうちの一匹は、あなたを思う祖母の魂かもしれません。和泉式部の和歌にも蛍に人の魂を見るものがあります。沢を舞う蛍は、貴方を恋しく思うあまりに彷徨い出ってしまった私の魂かと思う、という恋の和歌でこの句とは趣が違いますが、せっかくなので味わってみましょう。

物思へば沢のほたるも我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る 和泉式部

入選

目が覚めてしせん先にはソーダ水
夏服か合服か迷う朝
祭り後リュックに明かりほたるいた
どこからかカメ虫ほろり夏の夜
五月雨や音色がひびく町の朝
体育館演説の声と五月雨
雨の日に僕の金魚は死んだんだ
夏の色休み時間にそでまくる
風邪ひいて土日がつぶれる心梅雨
夕方に父と見つけた蛍かな
ばあちゃん家昔ながらのスイカ塩
下校中大きな日傘と小学生
すきま風カーテンなびく立夏かな
雨上がり紫陽花光るしづくかな
すっぱいな赤くていいなさくらんぼ

